再統一反対論から見たドイツの統合

外国語学部ドイツ語学科 4 年
A9952013　石川裕佳子

要旨：

-動機（大きなモチベーション）：

　ベルリンに留学中、ドイツ人の友人たちやホストファミリーから東西間の差別意識や統一ドイツに対する不満を垣間見ることがしばしばあり、ドイツ統一は上手くいっていないのではないかという疑問が湧いてきた。そしてドイツや日本で東西ドイツや EU についての授業を取っていく中でドイツ統一についての卒論を書こうと思うようになった。

-執筆目的（場合によっては方法論）：

　ドイツ統一について批判的であった人々の意見を考察することによって、統一の際の問題点を明らかにし、これからのドイツ社会や欧州連合は今後どのような道をたどっていくのかを展望したい。論文の構成としては第 1 章で統一後、東ドイツと西ドイツはどれだけ実質的に統一されているのかを分析する。そこでドイツの現状を人々の意識、生活水準、支持政党という３つの視点から把握し、現在の問題点を考える。そして次の章では再統一反対論者や統一方法に関して反政府的な人々の意見を年代順に考察していく。また、この章では現実に行われた統一過程についても簡単に触れる。その次の第３章では再統一反対論を元に現在の統一ドイツをもう一度概観する。

-主な結果：

　ドイツは 1990 年の統一における批判や反省点を今後の欧州統合のプロセスのなかで生かしていくべきである。ドイツ国内については今後より一層ドイツ政治における東の比重が増加していくと考えられる。

主要な参考文献：

仲井斌『現代ドイツの試練』岩波出版、1994。

ギュンター・グラス著、高木研一訳『ドイツ統一問題について』中央公論社、1990。

星乃治彦『東ドイツの興亡』青木書店、1991。

ユルゲン・ハーバマス著、河上倫逸、小黒孝友訳『未来としての過去　ーユルゲン・ハーバーマスは語る』未来社、1992、

ユルゲン・ハーバマス著、三島憲一訳「もうひとつの「理性の崩壊」ードイツ統一の欠陥と知識人による批判の役割ー」、『思想』No.809、1991 年 11 月号